tide pool tide pool
tide pool tide pool
tide pool tide pool
tide pool tide pool
tide pool tide pool

潮だまり

そのときどきに　おもったこと

第1集　2022.11 ～ 2023.4

i “いつもの顔” 》2
ii 細胞「壁」大活躍 》4
iii「お寺の鐘」と、記憶 》7
iv 焼きいもとタヌキとアルコール 》9
v 滝 瀧 たき 》12
vi 中間報告・我が脳神経科学の学び 》16
vii しあわせ三要素 》21
viii 記憶の成分「①記銘」について 》25
ix「急ぐことは忙しくしている人に頼め！」 》28
x 歩く「カミ」 》30

山田利行

“いつもの顔”

　以下、ある本からの引用だ。
//例えば、或る人間の表情がいつもと少し違っている事が分かる、その理由は何か、と尋ねられた時、われわれはいったいなんと答える事が出来るであろう？
其処では、日常の接触を通して何時の間にか体得したその人間の“いつもの顔”というものが無意識の基準に置かれている、と説明するより他に方法はないであろう。では、この“いつもの顔”とは何を言ったものであろうか……？//　この謎解きは、延々とこのあとに続く。ある本とは、三木成夫（みき・しげお 1925～1987）『生命とリズム』河出文庫 2013年 p249
　マスク※で隠された表情から“いつもの顔”が読みとれるかといえば自信がない。
　近づいてくる歩き方から「○○さん？」と思ったりする。後ろ姿でも「もしかしたら○○さん？」と思ったりする。脳科学者は脳の働きで説明するだろう。解剖学者、生理学者の三木成夫は、あなたに備わっている「おもかげ」が正体だという。
　p250 //機嫌のいい顔、悪い顔、嬉しそうな顔、悲しそうな顔に始まり、余り見る事のない歓喜と絶望、忘我と虚脱のそれから、遂には滅多にお目にかかれない激情の爆発した状態に到るまで、凡そ考えられる有りとあらゆる表情に接する事となるのであるが、この様な不断の接触を通して、そうした色とりどりの容貌

※コロナ禍で国民皆がマスクをしていた。

の変化を眺めやり乍ら、やがて何時とはなく、その相手の顔つきの持つひとつの”かたち”と言ったものを根強く体得する事となる。//

これが「おもかげ」ということだ。科学者がこのような文章を書くことに驚かされる。事例を挙げるのは面倒なので省略するが、幼児もすでに身につけている。だから、ごっこ遊びや見立て遊びが可能になる。表情に含まれる「こころ」を幼児は読み取る学習を重ねている。

三木成夫の「おもかげ」は一個の人間に留まらず、いのちの連続として太古いやもっと遡って地球の誕生にまで重ねている。そこまで言うのならば、科学者としてではなく思想家としてであろう。

“いつもの顔”――に、わたしたちはどれほどに安堵することだろうか。特別なことはいらない“いつもの顔”でよい。それが、一番いい。乳幼児も、おそらく同じだろうと思うし、“いつもの顔”に見守られて、遊ぶ。

潮だまりには、満ちて引くという海の時間(とき)が流れている。"いつもの顔"がそこにある。そして、波の音で癒され、心落ちつく。

(2022.11.15記す)

細胞「壁」大活躍

1960年代、新語「公害」が登場した頃、これに触発されてかどうかはわからないが、「環境」への関心が高まった。公害は環境への関心を呼び覚まし「エコロジー」という聞き慣れない専門語が話題になった。今日では「SDGs」（エスディージーズ）にまで発展している。

教養として私も学んだ。植物学の世界は植物分類の方法として「植物形態学」が優位にあったが、世論としてエコロジーへの関心が高まるにつれ「生態」という用語がマスコミ紙面に表れた。当時、宮脇昭『植物と人間』（NHKブックス 1970年）を読んでずいぶんと啓発された。出版社の本書紹介文は //自然の緑を破壊すれば人間自身の破滅に結がる。植物の本来のあり方を科学的に説き、植物と人間との正常な関わりにこそ人類生存の基盤があることを確認する。植物疎外の現代に植物生態学からの警鐘を鳴らす。// とある。

牧野富太郎の名はよく知られ「形態学」の権威だった。「権威」は、その世界で他の研究者の発言力を相対的に弱めてしまうが、世論の後押しで「生態学＝エコロジー」が環境問題を解決する指南役をするようになった。私の自然への関心も生態的な視野だった。

環境に関心を持ち始めて爾来50年。ところが、……。形態学が「いのち」の謎解きになることを、解剖学（発生学）三木成夫の著書※に出会って知らされることになった。

※『海・呼吸・古代形象』（うぶすな書院 1992年）など

中学生だったか高校生のときだったか、植物に「細胞壁」（「さいぼうへき」と読む）はあるが、動物にはそれがない（細胞膜はある）と習った覚えがある。植物と動物の差異を、知識として学んでおくことが求められたから。

植物は地上に根を下ろし天に向かって生長する。縦に伸びるため細胞壁が強靱になる。細胞壁は強靱さのかなめだった。だから、大木になるし千年も生きることができる（木質化への遷移についてもう少し勉強が必要）。これを高校生のときに学んでいたら、「いのち」への向き合い方は違っていたかもしれない。三木成夫はこのように植物の生長を説き、動物は細胞壁を持たないから水平方向に成長するという。動物（人間）は細胞壁を持たないので成長に限界が生じる。この縦と横のいのちについては稿を改めて考えたい。

身近なことでいえば、食物繊維に該当する。食物繊維といえば、海藻やキノコに多く含まれる。細胞壁は海藻や菌類にもあるという。キノコは菌糸でできているようなものだ。でも、巨木をイメージしたときは、だいぶイメージが違う。勝手に想像するが、栄養のまわりかたが違うのだろうと思う。ネットで調べたら、《細胞壁のはなし》をみつけた。このページの主宰者《東邦大学理学部生物学科 分子発生生物学研究室（川田 健文）》に //動物的な現象と植物的な現象の両方について研究しています。//とある。

動物と植物は別々に進化したと思い込んでいた。細胞壁に気づかされた三木成夫の論考タイトルは「動物

的および植物的」で、わたしたち人間の体内に植物の痕跡があるという。

ススキに群がるスズメ。スズメの重さだけススキがたわむ。夕陽に映えるススキの美しさは細胞壁が支えているのだ！と気づいた。スズメの重みに耐え、スズメが戯れられるのも細胞壁が役立っている。すごいなあと感心してしまった。

（2022.11.18記す）

2

細胞「壁」大活躍

「お寺の鐘」と、記憶

//秋の夕暮れなぞ、ひとりで物思いにふけっているとき、お寺の鐘が鳴る。そのときは気がつかなかったのに、しばらくして、ふと、われに返って、ああ、そういえば鳴ったなと、その音を思い出すといったことは、たれしも経験されたことがありましょう。つまり、記憶ということは、とくに意識しなくとも、ちゃんとおこなわれている。知らぬ間にからだのすみずみにまで入り込んでいるのです。わたしどもはこれを「無意識の体得」とよんでいますが、この知らぬ間に身についたものが、何かのきっかけで、これまた知らぬ間に外に出てくる。世間でいう「地金（じがね）が出る」ことです。// 三木成夫『胎児の世界 人間の生命記憶』1983年 中公新書 p5

お寺の鐘――これを耳にしたのはいつの頃だっただろう？　釣り鐘の”中”に入ったらどんなだろうといたずらな気持ちで試したこともあった。そのとき気づかなかったのに、しばらくして耳にしたような記憶というのは、お寺の鐘でなくても、誰かから声かけされて、ふと気づくということもある。あった。

記憶は《記銘｜保持｜想起｜忘却》の4つの段階がある。わたしたちが”ふつう”につかっている記憶は「想起」をさしている。お寺の鐘も誰かさんの声も「記銘／保持」されているらしいのだ。それを、想起しようとするかどうか、だろう。

記憶についてもう一つ。いい話だなあ、憶（おぼ）えておこう、と思っただけでは「忘却」しやすい。メモをする。口に出して確認する、交通安全「右よし・左よし」のように。新聞なら切り抜く（だけでよい、整理無用）。つまり、「思っただけ」でなく、動作を一つ加えればよいということだ。おそらく記憶する働きが脳のなかで複数になるからだろう（勝手な推測）。

「知らぬ間に身についたもの」――これは、なかなかのこと。筆者の三木成夫はこの「知らぬ間」を人類をさらに超えて地球の生命にまで演繹する。これには適わないが、あかちゃんがなんでもなめまわすことは、まさに「知らぬ間」にあてはまる。

かたはめで遊ぶ１歳の子。「こころ」の芽生えがそこにある。無意識の体得、だ。

（2022.12.3記す）

「お寺の鐘」と、記憶

焼きいもとタヌキとアルコール

山陽電鉄東須磨駅から歩いて20分、市街地を抜けると六甲山系の須磨アルプスを源流として小さな川が流れている。その水は、いつの頃になるのだろう天皇が利用していたという。トンネルが建造されていて路面の中央を水が流れている。これは「水道」らしい。トンネルの西側には透明度の高い池があり名称を「天皇池」という。真偽を確かめていないが、史跡として立て札もある。下流部は須磨離宮公園である。公園指定の場所ではないが、「離宮」の里ということだろう。

六甲山の水はプランドにもなっているほど、うまい水だ。六甲山系は、5年生のT君が関心をもっている岩石の花崗岩から成り立ち、花崗岩が砕けてできた砂質層から染み出てきている。先頃、砂防堰堤を越えたところ、清水の端（はた）でたき火をし、焼きいもをして楽しんだ。

焼きいもをするにはオーブンに見立てて”予熱した場所”を作る。2,30分かけてたき火をしたあと、いよいよサツマイモを投入する。焼き上がるには最低でも30分かかる。熾火（おきび）になった上にイモを並べる。あるいは重ねても大丈夫。そして、イモの”上”で再びたき火をする。後半のたき火の燃え方が悪かった。結果、30分程度でよいのに1時間ほどかかった。

おとなは焼きいもに、正確には「たき火に」夢中だったが、長靴をはいた幼児らはサカナとりに夢中。寒さに耐えて浅瀬でひっそりしていたところを、かわいい手がおそっていた。少年組は風化して砂質化した崖を登り、景色を楽しんでいた。火を囲み、あたりは野外探検の場所と化していた。

ここではなく明石川の堤防で、同じく死んでいたタヌキ
2022.10.4

「タヌキが死んでいる」と少年組から報せが入った。「シッポは？　縞模様？」「ちがう」と言う。縞模様ならアライグマだが、（だったら、タヌキか！）

たくさんあった焼きいもをいただき、場所を離れようと行動を始めた。「そこっ！」と示されたところに”タヌキ”がいた。白くて鋭い歯をむいている。手が上に突き出ていたので、つかんで持ち上げた。小さいが、タヌキだった。なぜ死んだのだろうと二度三度手を持ちながら観察していたら、後方から濡れティッシュが渡された。

腹のあたりが少々乱れていたので子どもには見せられないなあと思ったときに、ティッシュ。野外で動物の死骸に出会ったときは、しっかり観察するということが染みついていて私には自然な行いのつもりだったが、（きれいにしなさい）と言葉が飛んできた。今のご時世だから、アルコールだったかもしれない。冷たかった。と同時に、清浄感があった。絶妙なタイミングで心まで拭いた気分になった。

幼児の年長さんだろう。誰かさんから、「なんで死んでたん？」と声をかけられた。「わからん」と応えるしかなかった。

そういえば、つかまえられたサカナも横になっていた（ことを思い出した）　ピクッと動いていたようでもあるので、死なずにすんだかな。

時間を遡る。

登山口、小さな川の砂州ではクレソンやセリが繁茂していて水面を隠していた。そこへ3歳の〇〇ちゃんが足を踏み入れた。ジャブンと片足をつけてしまったことは言うまでもない。瞬間、もう片方の足で態勢を立て直した。泣きっ面になってしまったが、これが離宮探検のスタートだった。

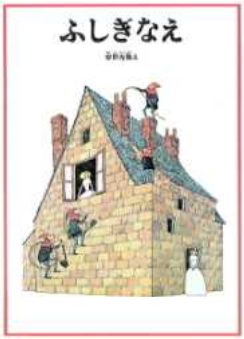
期待しても、願っても、タヌキに出会うことはない。熱い焼きいもを手にし、崖を登り、タヌキに対面した。私は、冷たいテッシュで心洗われた。

（2022.12.28記す）

焼きいもとタヌキとアルコール

滝 瀧 たき

野外体験は「非日常」体験ともいえる。



安野光雅の『ふしぎなえ』（福音館書店 1981年）は非日常をテーマにしている。タイトルの”ふしぎなえ”は13場面が描かれていて、最終場面では、蛇口からほとばしり流れ出る「水」が異国の街で川になる。

川で釣りに勤しむ人、橋から流れをのぞきこむ人、アヒルらしき水辺の鳥が描かれている。街を通り抜けて「滝」のようになって流れ落ち、漏斗（じょうご）に注がれる。じょうごは蛇口に接続されているので、蛇口をひねれば水は流れ出る。山から流れ出た水は川をとおって海に出るものだが、海ではなく蛇口にもどり「山」に帰るしかけになっている。安野光雅マジックを文章に置き直してみたが、実物の本でご覧あれ。

◇

写真（左）は笹舟。川には規則正しい流れがある。笹舟を浮かべて、どちらに流れるかは幼児でも予測がつく。流れの速さにも気づく。その流れの先が消えるとき、あるいは、降るように落ち

ていくところが「たき」だ。

写真（右下）は、高速道路の排水が落ちてきて滝のようになっている。須磨の海で遊んだ雨あがりの帰り道、先に歩いていた少年（小3）が”滝”に入っていた。

写真（次々ページ）は、布引の滝。新幹線の停車駅・新神戸駅から15分もあればたどりつく。遊歩道は舗装されていて、革靴・背広・ドレス（は、言い過ぎか！）スタイルでも行けるほどに近い。

◇

但馬地方で小学生を引率して谷川をくだった。川のなかを歩いたので沢くだりだ。ひざ下までだが水量は十分にあった。流れがにわかにきつくなったとき、前方の景色から川が消えていた。（あれっ？）と思い（もしかして……）とも思い、川から皆をつれて引きあげた。（たき）だ！　ヒヤッとした。脇道をくだり、滝つぼを遠めにして再び川で遊んだ。手持ちしていたポリ袋に水を入れ、風船のようになった水爆弾を互いに投げる・叩くして遊んだ。思い切り笑った。真夏の光景。子どもはもちろん、おとなもこれほど

楽しんだことはあれから今まで、ない。水は最高。その子たち、今では60歳くらいになっている。きっと覚えているに違いない。

尾瀬で出会った「三条の滝」は、私が出遭った滝でもっともすごかった。ネットで確認すると「幅30m、落差100m」という表記がある。水煙が立っていた。音もすごかったが、不思議な神秘さがあった。

但馬地方（旧美方町）に裏見の滝というのがあった。正式名称は吉滝（よしたき）。滝の裏側に回り込めるということだ。滝を浴びる体験もできる。もちろん挑戦した、修行の気分で。上から落ちてくるのは当然だが、その水は、前に行ったり後ろに下がったりする。あまりにもおもしろいので結果40分も入っていた。流れているだけと思っていたが、「波」を打っていると気づいた。これは驚きだった。

◇

地球がまわっていることは誰でも知っている。航海する船は水平線を越えて異国に着くことを知っている。しかし、かつては、海の果てで水が滝のように落ちる絵を描いた人がいたらしい。

水は空からも降ってくる。「滝のように」を冠にした大雨に見舞われる。

「たき」の語源を調べると、激流のこと、とある。上述のような滝をさすようになったのは後年になってからということだ。滝の別字「瀧」は、激流を遡る龍を想像してしまう。神戸に「垂水区」がある。この「垂水」が滝のことという。水が垂れると読めば、なるほ

ど……と妙に納得してしまう。

（2023.1.15記す）

布引の滝

滝 瀧 たき

中間報告・我が脳神経科学の学び

脳神経の勉強をしていていると、学者の言うことがあるいはニュアンスが違うことに戸惑う。学者といっても、生理学者・解剖学者・神経学者・心理学者・認知学者などそれぞれの立場で違う。20世紀末で高齢者の学者と21世紀現在で若手とでは真偽レベルで違う。いずれの場合も「学術用語」であるはずなのに脳の部位名称が統一されていないので混乱する。紛らわしい。脳疾患患者自身の記録や臨床医の場合を含めると、これまた違う。

ドキドキするから「こころ」は心臓にあると思っても、それはやむを得ない。恥ずかしい思いをしたら顔が赤くなり温かみも感じる。思わず手で顔をおおう。それでも、「こころ」起原は「脳だ！」と認識しようと努力しているのに、心臓から脳に向かって通じている太い血管がドキドキするのだから、こころは心臓にあるともいえる、という学者（人工知能）の説を耳にしたのは、ついこのあいだ、のこと。

こうした混乱は、学者自身にも存在する。科学的成果に到達していない事柄に対して、書籍（論文）において学者の態度が違う。有名な学者ほど根拠のない推測や、手前味噌の思想・倫理などが混在する。ネット情報利用は批判的になりやすいが、学者の知見独占はリテラシーの大きな障碍になっていると思う。文章表現も学術的スキルに対して稚拙さが目立つ。

脳神経科学は日進月歩でそれを書籍で学べることは

とてもありがたい。毛内拡（もうない・ひろむ）には期待したい。私自身、まだまだ混乱しているが、理解の到達、納得だなあと思っていることを以下、列挙してみる。

(1)

脳はどうやら3層構造になっている（▲図）。サカナにも、バッタにも、脳はある。生体反応にエンジンが必要だからだ。原始的な脳といえる。とはいえ、バッタとヒトとは機能としては同じだろうけれど、デザインはぜんぜん違うのではないか？　部位の名称としては、脳幹や扁桃核（へんとうかく）。真っ暗で見えない世界を怖がるのは扁桃核のはたらきらしい。虫が明るいほうへ飛ぶのも同じか？　飛んで火に入る夏の虫。

(2)

あかちゃんが這い這いから立ち上がり、ふらふらしな

がらも倒れない。たとえ倒れても、かばう手が出る。一方で高齢者の場合。ふらふらしていたら、もしかしたらつまずくかもしれない。倒れたとき、手が出るだろうか？　筋力の問題でもあるだろうが、脳神経のはたらきなのだ。

(3)
脳科学者に言わしてみれば、”脳の完成”は20歳になっても「まだ」ということになる。その「まだ」の意味は、生誕1年未満と20歳以降とでは、およそ違う。1歳未満と5歳児とでもまったく違う。生得的機能については、近年そして現在進行形で”発見”が続いている。脳神経のはたらきはまだまだ不思議の世界。人工知能で脳の説明はつかない。その逆もない。

(4)
懸命に、集中して考える（思索）【A】ことはもちろん大切なことだけど、ぼんやり考える、ボーとしながらすごす、いや何も考えない、おいしいものを食べる、散歩する、よく眠るなど【B】していると、ふと何かを思いつく。AよりもBがよい、というのでなく、AもBも大切で、このインターバル（間欠）がどうやら肝要らしい。

(5)
保育士が子どもに向かってする「手遊び」に意味があることを悟った。幼児だから＝手遊び、という補完的

代用動作ではなく、幼児の脳神経に働きかける「積極的教育」と言ってよい。

(6)
医療行為は診断や検査を手がかりに医師が行う。患者に説明もできる。患者もおよそ理解できる。投薬や手技手術などで治療は進められる。しかし、治療後に控えているリハビリテーションはオーダーメイドでなければならない。医療行為はカテゴリ行為だが、リハビリは個別行為なのだ。これは、「法と道徳」や「ゲーム（やスポーツ）と遊び」の対比に相当する。

(7)
「脳」という漢字一文字で表すことにも問題があるようだ。心臓、肺などのように脳も臓器の一つになってしまう。脳は、全身に張り巡らされている神経の中央司令室だ。セロトニンなど神経伝達物質やシナプス、グリア細胞を切り離しては理解不能になる。したがって、「脳神経」とひとくくりにするのがよさそうだ。

(8)★
さて、脳科学にまつわる大きな課題がある。脳は脳梁という境目に対して左右に分かれ片方を左脳、他方を右脳と呼び慣わしている。脳の活性に伴って電気信号が発せられ、それを測定することができる。特定の動作に対して左右のどちらがを個別に信号を認める。言語活動や計算では左が……絵画鑑賞や空間認識では右

が……。多数派が左（右）であり、少数派も存在する。おいしいものを食べていて、おいしいと感じるのは左（または右）かもしれないが、スプーンの動作は右（または左）かもしれない。スプーンが運んでくれるから食べるという動作が完了する。脳機能の局在は知見として得られているが、脳のはたらきは極めて複雑で単純にロボットに代行させられるものではない。

ありがたいことに、左脳右脳問題をはじめとする脳科学が生じさせている誤解に区切りをつけようとした論考にであった。誤解は「（脳）神経神話」と名づけられている。したがって、上述より続いて、辿りついた★でもある。

(9)

なんと！長年の課題が解決した。乳幼児のとき、特にあかちゃんは、写真をとるようにそっくりそのまま見たことをそのまま記憶するようだ――と過去に学んだおぼえがあるのだが、その根拠が曖昧になっていた。そのことに近似する記述を見つけた！

以上だが、今後、修正するかもしれないし、まだまだ自身の思い込みのワナに はまっていることがあるかもしれない。いつまでたっても修了には至らないだろう。

（2023.2.1記す）

しあわせ三要素

level of happiness
やりたい、たべたい、たのしい

学歴、身分、立場、あかちゃんからお年寄りまで、その区別なく、満足のゆく生きかたというものがあるのだろうか？　「豊かさ」とは何かを問うかたちで考えてもみた。むずかしい話に、はまってしまう。他人事（ひとごと）のようになってしまう。

野外活動で5歳児と向き合うとき「やりたい」と思わせるようにもっていく。5歳児にもなると先入観をもっている。「にんげん」を5年もやってきているので、それなりに価値観が芽生えている。「やりたい」と思わせるには、自身の価値観にとらわれないように誘惑することが肝腎だ。価値観は固定観念ともいえるが、それをうちこわして”発見”を体験すると「やりたい」に辿りつく。

あかちゃんは、寝返りをし、やがて這い這いをする。動く自由を得ると「やりたい」ことに向かって進む。

若者に限らず、高齢になっても旅行が好きな人は、どこかへ行きたい。老眼になっても、本の好きな人は読書に時間を費やす。

高校3年生のとき、卒業前、さいごの授業で先生（漢

文／田中稔先生）が言った。「好きなことを仕事にしないほうがいい。好きなことは自分用にとっておこう」と。それは「やりたい」ことは常にキープしておこう、という呼びかけだったのかもしれない。

しんしんと冷えているにもかかわらず、人気ラーメン店の前で列をなしている。お目当てのラーメンにありつけるには30分あるいはもっと時間がかかるのかもしれない。それでも「たべたい」。

毎朝、6時45分頃になると、朝食用にわたしはサラダをつくる。豆腐をボールに手で押しつぶして敷く。キャベツを丁寧に千切りにする。トマト、リンゴをきざむ。ラッキョをきざむ、隠し味でなかなかいい役割をする。浸しておいたワカメ、黒ごま、最後にカイワレダイコン。けっこうボリュームがある。パーフェクトに自己満足だが、この「たべたい」で一日が始まる。

お勤めでお昼のランチは「たべたい」というだけでなく、心安まるひとときだろう。野外活動を終え、足が園に向いている子らは「おなかすいたあ〜」と言う。

野外活動で焼きいもをすると「おいしい」。満たされて「たのしい」。ボランティア活動は「たのしい」とつづく。

一日が終わって入浴、シャワーの時間。ホッとする時間。「たのしい」というほどではないが、ホッとする時間は大切。

幼児は、一日を過不足なくエネルギーを消費するように終えたいと、わたしは思っている。幼児はいつまでもどこまでも遊ぼうとする。遊び過ぎると翌日に熱

を出してしまうことがある。十分遊びきると、つまりエネルギーをつかいきると、「もう終わりにしよう」と声をかければ、あきらめて休むようになる。過不足なく過ごすことを身につけるのが幼児期の肝要だ。「たのしかったね！」

「やりたい、たべたい、たのしい」を《 level of happiness：しあわせ三要素》と捉えてみた。

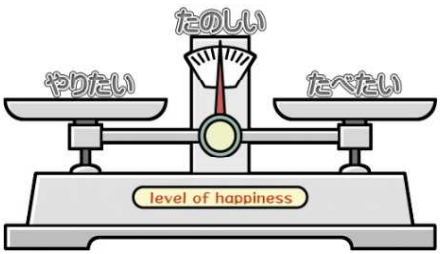
◇

否定的に考えてみよう。

「やりたい」ことがない。やる気にならない、とは？

幼児期にそれがあれば、先に述べた価値観へのこだわりが強いか、もっと重大な心理的危機を問わねばならない事態か。ヴィゴツキーの学習理論〈発達の最近接領域〉によれば「やりたい」ことが自身を突き動かしてくるのは自然なことだから。その「やりたい」ことがどれだけの起爆剤となるかは体験の積み重ねでしかない。それは成人しても同様である。〈いつまでも”子ども”〉は真理で、「”子ども”の心」を外に出さないのが”おとな”という観念が勝っているにすぎない。

「たべたい」という気持ち、衝動はだれにもある。空腹状態は血糖値の異常な低下かもしれない。生きるために食べるだけでなく、好き嫌い個人の嗜好を含めて「たべたい」欲求は生きてきた証だろう。だから、「たべたい」が満たされるとしあわせな気分になる。共通の欲求だから



共に食事をするともだちと時間を過ごせば「しあわせ」を共有することになる。

「たのしい」という価値を否定するとは、どういうことか。「たのしい」気分になれない。「しあわせ」を求めない。「しあわせ」でなくてもよい。小説やドラマのテーマになりやすいが、結果それは「しあわせ」を問うている。レジリエンス（立ち直り）は「やりたい」「たべたい」の復元力によるのだろう。

（2023.2.15記す）

人生究極の目的〈幸福になる〉
アリストテレス「ニコマコス倫理学」

人のこころは常に目的がある。
それは「なんのために」という問いかけでもある。

たとえば、「大学に入る」は一例にすぎない。
目的はさまざまであろう。
その目的を”理由（手段）”にして応えたところ、
「なんのために」と、さらなる目的を問われる。
これを繰り返す。

しかし、――
「幸福になる」という目的については理由を問われない。

記憶の成分「①記銘」について

どこでおぼえたことか、記憶として確かなことと思うが、ときに気のせいか？と思ってしまうこともある。その気になっていることを書き並べてみようと思う。

その1……

朝日新聞の連載記事で「無の境地」を追っていた（のが、あったように思う）　寺の坊主に訊いていた。

坊主が「無の境地」にあるときの脳波を測った。脳波が平坦になって「無」を確かめ、記者が人の名前を片端から読み上げた。ある名前を呼んだとき、脳波がピクッとした。実験が終わって、坊主に訊ねたら「私の子ども」の名前と言った。

その2……

小学生のとき図画工作の時間。版画制作の授業で「手を前にしてはいけません」と口説く言われた。夢中になっているといつのまにか手が出ていて、そのたび、机間巡回している先生に注意された。それでもやってしまって、黒い血を噴き出せてしまう。

ラジオだったと思うが、さっぱり思い出せない。棟方志功は「手に切り傷だらけ」だったという。棟方志功でも、夢中になったら手が出ている。意を得たり！の思いに至った。後年、青森の棟方志功記念館に電話照会したが、事実関係はわからないままだ。

その3……

岩城宏之がラジオで語った。出番の少ない演奏者の話題で、ある公演のとき、シンバルの出番が迫った。指揮棒を振っていると奏者が立ち上がった。いざ、ここでというとき、シンバルは打たれなかった。

さて、出番が終わったら坐ることになる。どうするのかな？と思ったら、やがて坐ったという。当事者は冷や汗ものだ。時効になったか、岩城宏之はおもしろい思い出話として語っていた。

その4……

日本は「王国」。小学校高学年のとき、社会の副読本で地図帳があった。その付録で国の一覧表があった。国名に並んで、共和国、王国、民主共和国等々あって意味がわからないまま眺めていた。日本の行に「王国」とあった。今となれば、行を間違えたかと思うが、天皇の国は王国ということか？と、ずーっと疑問のまま。

これを明らかにして解決したいと思っていた。検定教科書ということと、当時の年次を割り出せば見当がつくだろうと思い、神戸市立図書館「相談係」に問い合わせた。結果、神戸市立小学校で使用されていた社会科地図帳は、帝国書院の『小学校社会科地図帳 4,5,6年（五訂版）』と判明。現物は、京都府立図書館に所蔵されているという。まだ現物に再会していないけれど、いつか機会をつくって確かめたいと思う。

◇

「記憶」は4つのプロセスから成り立っている。①

記銘→②保存→③想起→④忘却となっていて、③想起を「記憶」と言い慣わしている。上記4つの例も③想起に相当する。地図帳付録ページの紙質まで、どうかすれば記憶している錯覚におそわれる。版画で手を切った瞬間は保存されなかったようで思い出せないが、黒い血の出た記憶はある。

胎内にいたとき、あかちゃんは母の声を覚えていて、生後すぐ、母でない声を区別して聞き分けられるらしい。

その一方で、さまざまな体験は「記銘」されるが、「保存」のプロセスつまり「意味づけ」されなかったものは、夢に出てくる、ということになるらしい。夢に脈絡がないというのは、なるほどと思う。

◇

生まれる前、2億5000年前の”記銘”も私たちの生命活動の基になっている、という。爬虫類にはなく哺乳類に進化することで（2億5000年前に）備わった脳神経の機能が今に至っているという。自己肯定や他者と力を合わせて事を為すなど「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」（草枕／漱石）は逃れられないワナともいえる。確かに、幼児にもこの片鱗はあるような気がする。これは「①記銘」とは言わないのかもしれないが、素直になりなさいという戒めでもあろう。

（参考）爬虫類ではなく、両生類から哺乳類は現れた

（2023.3.1記す）

「急ぐことは忙しくしている人に頼め！」

若いときに覚えた経験則。その意味が、わかった！

暇そうにしている人に頼んでも片付かないが、忙しい人に頼むと、困ったなあ〜の表情はされるものの機嫌よく引き受けてくれ〈こと〉を進めてくれる。

何をするにしても、脳はワーキングメモリを作動させる。容量に限りがあり、ワーキングメモリには　さほどの自由はない。たとえば、数を数えているときに声をかけられると間違えそうになる。

子どもと一緒に風呂に入り「じゅう数えたら上がってもよいよ」と声かけし、唱えている最中に、若い数字でカウントを邪魔するとその数字に誘われる。「じゅう」にたどりつくとワーキングメモリは開放され、次の動作に移れる。

ワーキングメモリは、生まれてまもない新生児も機能していると脳科学者はいう。ワーキングメモリが開放されている脳の状態をデフォルトつまり初期化ということで〈デフォルト・ネットワーク〉という呼称が与えられている。

デフォルト・ネットワーク状態のとき、脳は何も考えていないのではなく、自身とまわりの関係にアンテナをはる、ということになっている。2億5000万年前のむかし、進化して哺乳類になった頃、デフォルト状態の脳は身の安全をはかることに専念した。人間は集団を作って身を守った。こうしたことから、”人間関係”ひいては人間を含めた環境に配慮することが最優

先となった。

ワーキングメモリが開放されると、好みや意思にとらわれることなく、ヒトの脳は、いわば無意識によって次の関係性を求める。考える自由度が大きいと言ってもよいかもしれない。忙しい人はワーキングメモリを巧みにつかいこなしているというワケ。

「ひらめき」はこの機序で起きるらしい。ある脳神経科学者は「座禅」が有効としていたことにヒントを得て、私は「深呼吸」で良いだろうと思った。深呼吸することがワーキングメモリ開放の手助けになる。

手助けのもう一つは「メモをとる」ことだ。仕事でも家事でも趣味でも区別なく「メモをする」。メモをすることでワーキングメモリの負担を減らす。

お茶をのんだり、深呼吸したり、立ち上がってウロウロしたり……。これならできそうというアイデアで、ワーキングメモリを開放する。私はスマホに「メモと深呼吸」と書き記したラベルを貼り付けた。見るたびに深呼吸をしている。

（2023.3.15記す）

「急ぐことは忙しくしている人に頼め！」

歩く「カミ」

ヨチヨチあかちゃんが歩いている。「ショッピングバッグ」の持ち手に、右手の腕を通している。左手にもう一つの紙バッグをぶらさげていて、持ち手から抜け出た手はママに握られている。背丈に合わせて紙バッグは小さい。たたまれていて空だ。右手がぶらりさがったとき、腕から抜け落ちた。2,3歩で気づき目線を向けた。ママが気づいて、再び腕のなかへ。

言うまでもなく、かわいい！。歩きっぷりから、1歳2〜3か月だろうか？　6か月ということはなかろう。明石駅前のスクランブル交叉点で立ち止まり、「アッ、アッ」と声をあげていた。〈宣言的指さし〉もしていた。ママは「信号、赤ね」と声かけしていた。青に変わり、再び手をひかれて歩いた。ヨチヨチ歩きだけれど、速い！　ママは歩幅を合わせている。抱っこしないで／されないで歩き続けるあかちゃん。もっと眺めていたかったけれど、急ぎの用事があったので、心のなかでバイバイした。

1時間ほど前、岩田慶治の『カミの誕生　原始宗教』という本を開いていた。ヨチヨチ歩くあかちゃんと「カミ」がわたしのなかで結びついた。それは、大脳基底核と「カミ」の親和性を「あかちゃん」に発見したからだ。ママは気づいてない（失礼ながら……）だろうが、間主観性でママとあかちゃんは今一体となっている。カミと手をつないでいるということでもある。

文化人類学のその本は、あかちゃんが「カミ」とは

言ってなさそう。世界の宗教文化を通して人類の「こころ」をたどろうとしている。

「こころ」は、いのちとからだから発していると思ってしまい、目前のあかちゃんに「カミ」が宿っていると思ってしまった。

その前日、わたしは保育園に居た。門を開け、園庭に入ったとき、女の子が抱きついてきた。「あれっ？なんで……」と言いかけて、「そうか、学校、春休みなのね」と言った。卒園児の1年生が来ていた。お姉ちゃんは、妹？（弟？）見極めるほうに気が向かなかったが、一緒に遊んでいるふうだった。表情はすっかり”姉”だった。かつて「カミ」だった姉は「カミ」をあやしていた。

◇

「こどもを核としたまちづくり明石」はすっかり有名になった。明石駅周辺の人通りで、あかちゃんを確かによく見かけるようになった（気がする）。子育て支援政策は人口増につながりシティセールスがもたらした”成果”といえるだろうが、果たして実際に、子育てに功を奏したかはこれからだし、「功」を確かめる方法は果たしてあるのか？とも思う。人口増が今後、負の効果にならないことを願いたい。

市長退任を表明した泉房穂氏の後継に女性候補が指名された。候補は、子どもの教育と環境が得意。小学3年生のときに自然教室に参加し、これをきっかけにして自然に興味をもったという。自然環境教育がどのような成果をもたらすのかを継続して調べるようにと

当時にわたしは課題をもらっていたが、象徴的な成果を生み出そうとしているように思う。当選することを願いたい。

「カミ」はいたということであり、「カミ」は「カミ」に見守られてるということでもあるだろう。

神さまに軽率だったかな。神さま、ごめんなさい。

（2023.4.1記す）

ある「カミ」

第2集を予定 》》

https://193pub.com/?page_id=15300

tide pool 潮だまり 第1集 2022.11～2023.4 ver.01

発行者　山田利行　mobile 080.1445.3221
住所　〒673-0023 明石市西新町2-1-6-405
2024.2.17編集発行